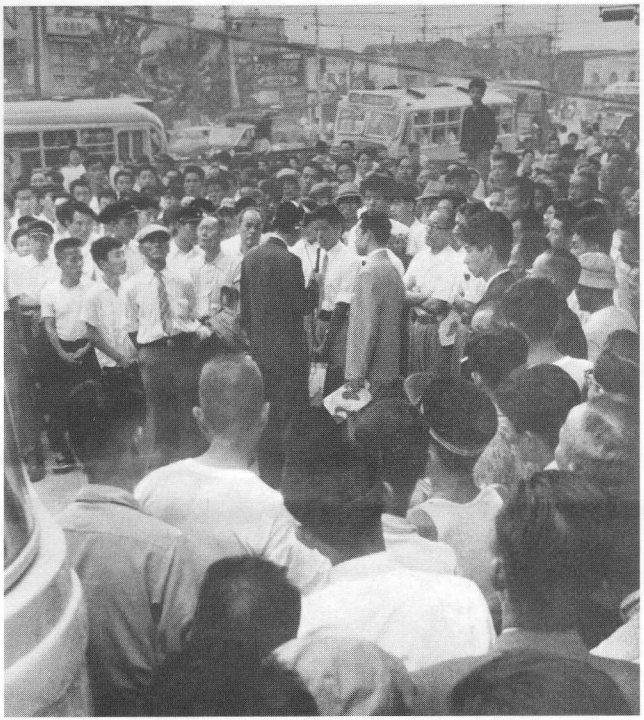
みんなで語ろう民放史

題字　中川　順

『青空会議』の時代

辻　一郎（MBS）



青空会議…東京　名古屋　大阪を結ぶ三元放送
（NJB7周年記念誌より）

民間放送が誕生したばかりの1950年代、新日本放送（現毎日放送）のラジオに、文化放送と中部日本放送と一緒になって作っている『青空会議』という街頭録音番組があった。これから書こうとしているのは、その番組のいわばローカル版、1958年（昭和33年）に制作し、大阪だけで放送した『青空会議スペシャル』にまつわる話である。

☆日教組の勤務評定反対闘争

1958年、日本の教育現場は、日教組が前年から取りくんでいた勤評闘争で、激しく揺れていた。三重県では教委と教組の板ばさみになって、首吊り自殺をはかった教育長まで出た。この闘争は、文部省（現文部科学省）が教員の勤務評定を実施しようとしたのに対し、現場の先生たちが反対し、撤回を求めて展開した闘争である。なかでももっともラジカルだったのは、高知県や愛媛県とならんで、和歌山県の先生たちだった。新聞には連日闘争の模様を伝える大きな活字がおどっていた。

☆民衆の声を伝えた街頭録音

そうしたある日『青空会議』の新日本放送のプロデューサー瀬戸寛太郎さんから、東京支社報道部のわたしに電話が入った。「勤評反対の統一行動日に、大阪と和歌山を結んで、わが社だけのローカルで放送する青空会議スペシャル版を作りたい。ついては東京支社のスタジオに、文部省と日教組のしかるべき人物を、ゲストとして招いてほしい」との依頼だった。

この『青空会議』とは、その時々の政治や社会の問題にテーマを求め街頭で市民の意見を拾って作る「街頭録音」番組だった。しかし今では、街頭録音と聞いてもわかる人は少ないだろう。

戦後間もない1946年(昭和21年)、NHKがマイクを民衆に開放して、世の中のさまざまな問題について日ごろいだいている意見を率直に語ってもらおうと誕生したのが、この番組形式だった。

第1回のテーマは「あなたはどうして食べていますか」である。それまでお上の声しか伝えていなかったNHKが、初めて一般市民にマイクを提供した試みは、新鮮で、驚くほどの人気を呼んだ。

『青空会議』はこうした街頭録音の民放版として、1954年(昭和29年)にスタートした。NHKと基本的にちがっていたのは、あちらがどこかひとつの会場で市民の声を拾っていたのに対し、こちらは三社共同制作だけに、東京、名古屋、大阪、三か所の会場を結んで収録していたことである。おかげで地域のちがいにもとづく意見の相違が、自然にとりこまれて面白かった。

ただ当時の日本人は、人前で喋ることにはまだ不慣れだった。特にマイクの前に立つにあたっては、それなりの覚悟が必要で、意見を求められても逃げる人が多かった。しかしそうであっても、折角のめずらしい機会を見捨てては立ち去りがたく、アナウンサーを遠巻きに、黒山の人たちが群れている光景をよくみかけたものだ。

それにしてもいま思えば、『青空会議』というタイトルには、線路わきやガード下に、青空市場と呼ばれるヤミ市が広がっていたころが反映されていて懐かしい。街の中心街はどうにか復興していたが、場末にはまだ空襲の焼け跡が生々しく残っていた時代だった。

放送時間は新日本放送では長い間、月曜午後4時台だったが、この話のころには、月曜夜の11時台に移っていた。第1回は「吉田内閣は退陣すべきか」だった。

☆若いラジオのエネルギー

さて話をもとにもどせば、瀬戸さんが連絡してきた『青空会議』のスペシャルは、いつもの通り三元放送の形式をとりながら、文化放送と中部日本放送を抜きにして、独自に作ろうというものだった。二社を抜いたのは、大阪だけでなく、和歌山でも意見を聞くためである。説明をうけてわたしは、「面白い。何よりもタイムリーですね」と、すぐにのった。

当時、新日本放送の報道部にはやや軽はずみなほど「ノリに富んだ」人物がたくさんいた。その頃の民放はおしなべてそうだったかもしれない。ともかく何かあると、すぐに特番にとりくんだ。それほど身軽で野次馬精神旺盛だった。

わたしより10歳ほど年上の元社会部の新聞記者と飲んでいて、よく出る話題に、あのころのラジオがある。「あのころのラジオはすごかったな。僕ら新聞記者が、これ以上やるとヤバイぞと、ブレー

キをかけるときでも、ラジオはおかまいなしにつっぱしっていた。経験不足で、これ以上つっこむとどんなことがおこるか読めないためだったろうが、その無謀さが面白かった。ヒヤヒヤしたが、ラジオのエネルギーにもなっていた。今の週刊誌に一寸、似ているね」。

たしかに当時の民放の報道には、若い正義感をふりかざし、新聞以上におめず臆せず立ちむかっているところがあった。特に権力批判には積極的で果敢だった。

その背景には、前述の元新聞記者氏の指摘どおり、スタッフの若さゆえの未熟さや気負いも、あったにちがいない。ともかくたずさわっているものが皆若く、それだけに腰が軽く、コトがおこった時の対応も素早かった。またテレビとちがってラジオでは、気軽に思いつきをモノにできた。だから誰もが気軽に企画を出し、気軽に実現させていた。この身の軽さが、エネルギーにもなっていた。

当時のラジオの得意技には、たとえば、「録音構成」という手法があり、差別、死の灰、A級戦犯といった大状況から、ある映画が人気を呼んでいる、こんな歌が若者に受けているなど、とかく見過ごされがちな社会現象までテーマにとりあげて、その根っこにあるものを探り出し、検証していた。

その背景には、まだ誕生してから数年で、組織や伝統、人員面でNHKに劣る民放が、「ストレートニュース」という総力戦では、一歩リードを許しながらも、個人プレイのきくゲリラ戦の番組づくりで、勝負をかけていたのだともいえるだろう。

☆日教組とは同席しない

瀬戸さんからの連絡をうけて、早速、文部大臣に出演を依頼した。返事はすぐきた。

「残念ながら、出演できません」

聞くと、文部政務次官も出演はムリだという。いずれも「スケジュール上の都合だ」とのことだったが、本当のところは「いまこの時期に、日教組と同席するのは困る」ということだろうと察しはついた。

話は突然とぶようだが、当時わたしは、南極記者クラブに入っていた。あのころは、南極にかかわる出来ごとは、すべてビッグニュースになった。たとえば南極観測船宗谷の動向や、昭和基地にいる越冬隊員の行動は、いずれも大きくあつかわれ、「南極の氷に閉じ込められた宗谷が、ソビェトの砕氷船オビ号に助けられた」といったニュースが、夕刊のトップをかざった。それだけに南極観測統合推進本部が、毎朝開く記者会見の取材は欠かせなかった。

南極記者クラブは文部省のなかにあり、南極観測の本部長は、文部大臣だった。それだけに取材で接することも多く、よく知っている仲だったのに、断られたのは意外だった。

しかし、同時に、「これはどの線でどう押してもどうにもならない」と察しがついた。しかしすぐにあきらめるわけにはいかない。「そこを何とか」と、ねばれるだけねばって数日すぎた。大阪からは「まだきまらんのか」と、朝に夕にの催促である。放送日もせまってくる。

たまりかねて、親しい稲田事務次官に経緯を話して、「何かいい知恵はないでしょうか」と相談した。「それはお困りでしょう。しかし大臣や政務次官はやはり無理でしょう。ぼくが出ます。ご不満かもしれないが、それで我慢して

ください」彼は歯切れのいい口調でそういった。政治家が出られないのに、役人が出られるだろうか。いぶかしい思いがしたが、ホッとしたのも事実だった。

☆日教組は泊り込みで交渉

一方、はじめは簡単に考えていた日教組側の出演交渉も意外に手間どった。

日教組から出てもらうのは、小林武委員長しかいないと初めから考えていたが、その小林さんが会議続きでなかなかつかまらない。何度出むいても「会議中」「会議中」の返事である。おまけに「委員長の出演の件は、本人にあたって下さい。取り継ぎもできません」と、統一行動日を目前にして書記局はそっけない。

とうとう泊り込みを覚悟して早朝から日教組につめかけた。まもなく委員長が出勤してたが、チラッと顔をあわせただけで、すぐに会議室に入ってしまった。日ごろの小林さんからは想像もつかない、ぶっきらぼうな表情である。しかも会議はいっこうに終わらない。昼食もそして夜食も、会議室に運びこまれた。

いま思えば、当時の組合とか左翼政党は、会議をことのほか好きだった。民主的な手続きを大事にしたということかもしれないが、反主流派をかかえている状態では、会議にかけてもまなければ、何ごともきめられないということだったのだろう。それにみんな議論好きだった。

奇妙なことに、統一行動日の直前だというのに、書記局には他社の記者は誰も来なかった。もっともこう会議続きでは、来ても取材ができるわけはない。しかしそれにしても「だれも」となると落ちつかない。見捨てられたような気分でひたすら待った。

この様子を見て気の毒がってくれたのが、当時、書記局次長だった槙枝元文さんである。時間つぶしに他愛もない話をしては、延々とつきあってくれた。いま思うと書記局次長がなぜ会議に参加しなかったのか不思議だが、おかげでずいぶん気がまぎれた。彼はあとで日教組の委員長や総評の議長になり、参議院議員にもなった人物だが、のちのちまで顔をあわせると、「あのときあなたはずいぶんねばったね」と笑われた。

☆真夜中のOK

それにしても待つ身はつらい。うっかり席をはずせば、その間に会議を終えて、外出されてしまうおそれがある。いったん外出されれば、今度はいつつかまえられるかわからない。会議が終わったところで本人をつかまえて、何としてでも承知させよう。そう考えて、便所へいくのもひかえるようにして、とにかく待った。

ようやく小林委員長をつかまえることができたのは、真夜中の零時か、一時か、そんな時間だったと記憶している。小林さんは議論疲れした顔を一瞬ゆるめて、出演を快諾してくれた。案に相違のあっけなさだったが、それでもひとつ注文があるという。

身構えて聞くと、何のことはない。「当日は統一行動決起集会の会場に、きっと右翼が来るだろう。だから会場からスタジオまで、お宅の車で連れ出してほしい」という頼みだった。

翌朝、一番で大阪に、「すべてOK」の連絡をした。しかし実は「すべてOK」ではなく、もうひとつ問題が待っていた。

☆次官からの電話で再びふり出しに

その翌日だったか、翌々日だったか、稲田事務次官から、思いがけない電話が入ったのである。

「いや、ご依頼の件ですが、初等中等局長の内藤君が、日教組と同席されるとは不見識きわまりないといってましてね、出るわけにいかなくなったんです。いったん引き受けておいて、本当に申しわけないのですが」

「内藤さんは、局長じゃありませんか。次官がどうして局長の指図をうけなきゃいかんのですか」

いろいろいってはみたが、どうにもならない。このころの初中局長は内藤譽三郎。後の参議院議員だが、文部省きってのタカ派として知られ、内藤タカ三郎とも呼ばれていた。ともかく局長の身で次官に注文をつけるくらいだから、ハンパではない。このときもなかば本気、なかば芝居で、事務次官を脅したということだったのだろう。その剣幕に、多分、閉口して、急遽、断りの電話になったにちがいない。困りきった声をだしている。

電話を切ってから、頭をかかえた。収録日はせまっている。もう時間がない。どうするか。

☆じゃ自民党で探せよ

このとき、「文部省がだめなら自民党で探せばどうなんだ」と同僚がいってくれた。考えるとまったくその通りである。教えてくれたほうは、そんなことにも気づかずにわたしが悩んでいたのを知って、びっくりしている。これはびっくりするのが当然だ。わたしはそれまで、ゲストは、文部省の関係者と、一途にきめこんでいた。

「なるほど、自民党か」。

そうなれば、あとは簡単である。政府与党側のゲストとして、当時、党の文教部会の責任者だった橋本登美三郎さんにお願いした。ゲストさえきまれば、東京支社の仕事は、終わったも同然だ。あとは当日、橋本、小林両氏に、スタジオに来てもらうだけである。

収録当日、橋本さんのほうは同僚にまかせて、わたしは小林委員長を決起集会の会場へ迎えに行った。たしか日比谷公会堂だった。小林さんはゆったりとした大人の雰囲気の持ち主ながら、アジ演説はうまかった。終わったところで、すぐに社の車に乗ってもらった。

ところが、この様子を見ていた某社の記者が、「5分だけ貸してくれませんか」と懸命になって頼んできた。昼ニュース用のインタビューを録りたいのだという。小林さんは、「ぼくの身柄は、辻君まかせだ」と構えている。

つい同情して、当時、内幸町にあったその社の玄関で、5分の約束で引きわたした。ところが5分

第1回青空会議（新宿西口）昭和29年2月27日（文化放送「Q友だより第8号」より）

が10分になり、20分になっても小林さんは戻ってこない。はじめから、「5分で済むわけはない」と思ってはいたが、20分をすぎたころから不安になった。いらだって正面玄関のエレベーターホールの前で待ちながら、「仕事では、妙な同情は禁物だぞ」と肝に銘じたのも、いまとなっては懐かしい思い出である。

☆活気にあふれた討論だが…

こうしてともかく収録し、その夜放送した番組は、わたしがいうのも変なものだが、なかなか面白い出来だった。大阪と和歌山の会場での討論には、切迫した緊張感がただよい、問題点を過不足なくうかびあがらせていて、いい番組になっていた。

会場からの質問や注文に、真摯な態度で答える東京のスタジオにいるふたりのゲストも実にいい感じだった。いつも喧嘩腰でしか語ろうとしなかった自民党と日教組が、こんな静かに意見を交わしたのも、少なくとも公式の席では、はじめてだった。

当時のある新聞の世論調査によれば、

勤評に賛成 37パーセント
勤評に反対 36パーセント
わからない 27パーセント

で、是非はまさに国論を二分していた。番組はその状況をそのまま反映して、活気にあふれていた。

だが残念ながら世間では、番組はほとんど評判にならなかった。少なくても、東京にいるわたしの耳には聞こえてこなかった。

その少し前、関西の女友達に、この放送にさりげなくふれる手紙を書いていた。しかしやがて彼女からきた手紙には、「ぜひ聞こうと思っていましたが、11時の放送まで待てなくて、眠くなって寝てしまいました」と書いてあった。「世のなかとはそんなものだな」と思い、その時間をはずしても、後で読んでもらえる活字の世界を羨ましく感じたことを思い出す。

☆街録姿を消す

書きおくれてしまったが、NHKの街頭録音はこの話の数ヶ月前に、「当面の使命を終えた」として、すでに終了していた。

街頭録音は人が集まってくれて初めて番組になる。したがって、「次はどこで」と必ず開催場所を予告する。しかしその予告した場所に特定のグループが集まってマイクを独占することが目につくようになり、自由な発言を確保するのが難しくなったことが、うちきりの原因だったと伝えられた。

その点、東京、名古屋、大阪を三元で結ぶ『青空会議』は、たとえば東京で特定のグループにマイクを独占されかけると、大阪にわたして回避する、名古屋を呼んで難をさけるという措置が、簡単にとれるだけに具合がよかった。

ではありながらその『青空会議』も同じ年、1958年の暮れには幕を閉じた。

つまりここに記したスペシャルは、NHKの街頭録音がすでに終わり、民放の街頭録音も間もなく終わろうとしていた短い時期に、ちらっと咲いたアダバナのような番組だった。

本格的なテレビ時代の到来までには、まだ間があったが、時間と金をたっぷりかけてラジオの番組をつくれるような状況では、なくなりかけていた。民放版街頭録音うちきりの背景には、そうした時代も反映していた。